
沙羅双樹

霜月 雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

沙羅双樹

【Zコード】

N1055X

【作者名】

霜月 雪

【あらすじ】

不吉の象徴 左右で違う瞳をもつ少女、沙羅は、唯一の肉親である母を亡くしてから、毎日のように村人から暴行をうけていた。気絶していた沙羅を助けたのは、『医者を目指している』という不思議な少年、湊。

ひょんなことから一緒に住むことになった二人は、次第にお互い惹かれ合う。

不吉の象徴と忌み嫌われる少女と、どこかの貴族の子息の少年。二人の恋の結末とは ?

「あなたに出来て良かった。そつ細つの中、愚かですか？」

第一話

貴方に出逢えてよかつた。

そう思つのは愚かですか？

『沙羅双樹』

黄昏時。空が真紅に染まり、肌寒さを覚える中で、無造作に一人少女が倒れていた。村はずれの森の中だ。少女の身につけているものは、所々破れ、汚れていて、放り出された四肢には痣や、無数の傷がある。

「う……」

びくり、と指が震えた。掠れた呻き声を上げ、少女は目を開ける。その瞳は、奇妙な色をしていた。右目は普通の黒で、左目は綺麗な銀を宿している。左右で違う瞳 不吉の象徴だ。

少女、沙羅は緩慢に身体を起こし、顔を顰めた。身体中が痛い。自分の姿を見下ろし、目を伏せた。村人に蹴られ、殴られた部分が鈍い痛みを訴える。無惨に破れた着物は、母のお古だった。気に入っていたのに、この有様ではもう使えないだろう。

痛む足に力を入れ、沙羅は覚束ない足取りで家へ向かう。森を抜けた向こうに、こぢんまりとした木屋がある。それが、沙羅の家だ。

腐りかけの扉を開け、沙羅は布団に倒れ込んだ。布団といつても、薄い布で出来たもので、ほとんど意味をなさない。夜が冷え込むこの季節では、身体を丸めていないと眠れないほどだ。地面の冷たさが伝わってきて、沙羅は身体を震わせた。

「母様……」

掠れた声で呟いて、沙羅は瞼を閉じる。

不吉の象徴である瞳をもつた沙羅が、今も生きていらるのは、ひとえに母のおかげである。母は、人望あつく村人の中心的な存在であった。

母は18で沙羅を授かり、そして産んだ。不吉の象徴の瞳を宿していても、母は沙羅を愛し、育ててくれた。村人は反対したらしいが、それを押し切って、村はずれのこの木屋に移り住んだ。しかし、その母は去年ぽっくり逝ってしまった。

それでも、母は最後まで沙羅を愛してくれたのだ。そんな母に村人も心打たれたのか、沙羅を殺すということはしない。

しかし、暴行は加える。

沙羅と同じくらいの者たちなら、まだいい。しかし、大人となると話は違う。

気絶するまで殴られるのだ。毎回会つ度のことで、沙羅はもう慣れてしまつた。

暴行を受けないようにするには、外に出なければいいのだが、沙羅も食べないと生きていけない。森の中にある川で魚や、山菜を探りに出かけるのだ。

そしてその時会つては、殴られる。

痛みを訴える身体を無視して、沙羅は意識を手放した。

少年は、溜息をついた。

結構歩いてきたはずだが、未だ森を抜けない。そろそろ足が痛く

なってきた。鞄を持つている手も限界を訴えている。

「ん……？」

木々の間を抜け、一息ついた時、顔を顰めた。

人が倒れていたのだ。

地面に広がる漆黒の髪で顔は見えない。服からのぞく四肢は細く、所々に傷や痣があった。その人物の傍らで膝をつき、前髪を払った。髪からのぞく顔は、同じ年ぐらいの少女のものだ。顔にも傷がある。痛々しいその姿に、少年は目を細めた。

「とりあえず……運ぶか」

そう言い、少年は少女を抱き上げた。難なく抱き上げられた少女は酷く軽い。

辺りを見回すが、休められる場所はなかつた。仕方なしに、少年は足を進める。

しばらく歩いていると、森を抜けた。あん堵の息をはき、少年は顔を上げる。

木屋があつた。

もしかしたら住んでいる人物がいるかもしれないが、仕方ない。

木屋の扉を開け、少年は中に入った。

見ると、布団が敷いてあり、人が住んでいた形跡がある。とりあえず布団に少女を横たえ、少年は鞄の中から薬草をとしだした。

「よし……」

一通り怪我の手当をおえ、少年は満足げに微笑むと、少女の髪を撫でた。砂の混じった髪は所々ひつかかる。長さもばらばらで、少年は怪訝な顔をした。

身体にあつた傷も、今日出来たやつでないものもあつた。この少女は一体なぜこれほど暴力を受けているのだろうか。

思案していると、呻き声が聞こえた。

弾かれたように顔をあげ、少年は少女を見る。顔を顰めている少女は、瞼を開けた。

少年は息を止めた。

少女の瞳は、厭、片田は、銀を宿しているのだ。

黒と銀の瞳 左右で違う瞳。不吉の象徴だ。

なるほど、と納得し、少年はおきた少女に微笑みかけた。

「おきたか……気分はどう?」「

少女はしばらくなと瞬きを繰り返していたが、やがて立ち上がりつた。いきなり動いたせいで、傷が痛む。顔を歪めた少女に、少年は慌てて言った。

「いきなり動いたら駄目だ! あんた怪我してるんだから!」

そんな少年の言葉が聞こえていないのか、少女は少年を睨んだ。

「あなた……誰……」

ようやく口を開いた少女の声は、凜とした聲音だった。少年は一瞬目を丸くしたが、すぐに微笑を浮かべて口を開く。

「俺は、湊。みなど君は?」

柔らかい聲音に、少女は驚いたように目を丸くしてくる。やがて、小さく呟くように言った。

「沙羅……」

「そつか……。沙羅、沙羅ね……」ijiは沙羅の家?

確かめるように呟いて、湊は沙羅を見た。湊の問いに、沙羅は小さく頷く。

相変わらず警戒しているが、とりあえずは会話をしてくれそうだ。「あなたは……どうして私を……」

沙羅の言っていることを理解し、湊は苦笑した。

「あー……俺ね、医者用指してるんだ。だから、目の前にいる怪我人放つておけなくてさ

「そうじゃなくてつー!」

「その瞳のこと?」

湊の言葉に、沙羅の身体は固まる。そして、自嘲するような笑みを浮かべた。

「……やっぱり知ってるんじゃない。殴るならわざと殴れば?それとも殺す?」「

沙羅の言葉に、湊は驚いたように目を見張った。しかし、すぐにその顔は笑みに変わる。輝かんばかりの良い笑顔に、沙羅は警戒を高めた。しかし。

「……俺さあ」

話題を変えるかのような明るい声に、沙羅は怪訝な顔をする。「医者になること、親に反対されてるんだよね？」

何の話だ、と沙羅は眉を寄せた。それに構わず湊は続ける。

「で、家出してきたわけ」

雲行きの怪しげな話に、沙羅は思わず後退した。しかしその腕を湊はすかねず掴む。

「ここに住んで良い？」

まひ、俺あなたの傷なおしただらっ」と言ひ湊に、沙羅は顔を引きつりせた。

「はあ！？」

素つ頓狂な声をあげ、沙羅は田の前で笑う少年を見つめた。

変わらず笑っている少年は、自分がどれほどおかしなことを言っているか理解しているのだろうか。ありえない。

「あなた……自分の言つてることわかつてゐるの！？私は

「不吉の象徴」

沙羅の言葉を遮つて湊は続けた。相変わらず微笑を浮かべながら、湊は沙羅を見た。

「左右で違う瞳を持つ者ことを表す言葉 普通、その瞳を持つて生まれてきた赤子は生まれてすぐに殺し、亡骸は灰も残らず燃やされる」

そこで一端言葉を句切り、湊は溜息をつく。呆れたようなその様子に、沙羅は怪訝な顔をした。

「はつきり言って俺は、そんなもん信じてない。たかがちょっと色が違うだけじゃないか」

「厭、ちよつとじやないわよ」

沙羅は黒と銀の瞳だ。灰色とかならばまだ分かるが、さすがに銀で『ちよつと』はないだろう。本人の主張を無視して、湊は腰を下ろした。肩をほぐして、ここに居座るつもりでいるらしい。

沙羅は呆れて声も出なかつた。ありえない、と思う。

ありえない。でも、嬉しい。

生まれてこのかた、まともに会話の出来る人と言えば、母しかいなかつた。

その母はもういない。毎日のように繰り返される暴行に、沙羅は一人で耐えねばならないのだ。

そう思つたとたん、涙が溢れてきた。

母が死んだときに枯れたと思っていたのに、次から次へと溢れて

くる。

咄嗟に顔を隠そうとしたが、時既に遅く、湊は驚きに目を見張つて沙羅を凝視していた。そして、慌てて立ち上がり、沙羅の肩に手をおく。

「え……ちょっと！ そんなに厭だつた！？」

狼狽する湊に、沙羅は違うと言いたかつたが、それも叶わず、口からは嗚咽がもれるだけだ。それでも、会つて間もない人の前で大泣きするのは阻まれて、沙羅は嗚咽を？み殺そつと、唇を強く？んだ。それに気づいた湊は、沙羅を抱き寄せる。

「……我慢しなくていいんだ」

その言葉に、沙羅は我慢できずに泣いた。

好きなだけ泣いた後、沙羅は湊に抱きついたままに気付く、慌てて身体を離した。頬は涙で濡れていて、瞳は真っ赤だ。

「ご……ごめんなさい」

か細い声での謝罪を、湊は笑つて返す。

「いいよいよ。気にしてないし」

でも、と湊は心配げに眉を寄せた。心なしか、声の音量が下がる。「あの、さ……泣いたの、俺のせい？」

沙羅は初め、意味を理解していなかつたが、分かつて慌てて首を横に振つた。

「そんなわけない！」

力強い否定に、湊は安堵の笑みを浮かべる。

「そつか……よかつたあ。厭すぎて泣いたのかと……」

湊の言葉に、沙羅はただ首を横に振る。やりとりが終わると、二人の間に沈黙が落ちた。それを破つたのは、意外なことに沙羅だ。

「……嬉しかった」

「え？」

上手く聞き取れなくて、湊は聞き返す。

「嬉しかったの。……村の人は、私と話なんてしてくれないし……頬を赤く染めて、沙羅は恥くようと言つた。その言葉に、湊は驚きを隠せず、呆然と沙羅を見つめる。しばらく呆けていたが、我に返つて、首を傾げた。

「……それはつまり、ここに住んで良いってこと?」

「…………本気なの?」

顔を赤くしたまま、沙羅は湊に問う。湊は満面の笑みで頷いた。

「もちろん!」

「じつして二人は、共に住むことになつたのだ。

朝早くに、沙羅は目を覚ました。ふと横を見ると、心地よさそうに湊が眠っている。布団とは言い難い布きれで、ちゃんと眠るのだろうか、と沙羅は心配になつた。

湊は、見るからに上質な服を着ていた。普通の人なら触ることも出来ないであろう服に身を包んだ少年。どこかの貴族の子息なのだろうと予想はつく。

それなのに、こんな薄汚れた木屋に住むなんて、せぞかし屈辱だらうに。

「…………

沙羅は自分の思考を追い出すより、頭を横にふつた。

外に出て、近くの井戸で水をくむ。朝方は、夜と同じくらいに冷えているので、思わず肩を震わした。

しかし段々と寒さにも慣れてきて、沙羅は息をつく。

重たい水の入った桶を持ち直し、沙羅は木屋に入った。湊はもう

おきていて、丁寧に布団がたたまれている。しかし当の本人が見あ
たらない。

怪訝に思い、沙羅はまず台所に桶を置いて歩く。台所に通じる
扉を開けると、そこに湊はいた。

「あ、おはよー沙羅」

朗らかに笑つて挨拶する湊に、沙羅は同じく笑みを返した。

「おはよー、沙羅……って、なんでここに?」

「なんだ、て…。さすがにすべて任せられるわけにもいかないしさ。食
事ぐらい、作れるよ」

得意げにそう言つて、湊は置いてあった包丁をちらつかせる。沙
羅はとりあえず桶を地面において、籠から山菜を探りだした。
「そつか……じゃあ、とりあえず、なにか作れるものつくつて」
湊に山菜を手渡しそう言つと、元気の良い返事が返ってきた。
「まかして!」

それに後悔するのは、後數十分のこととなる。

第二話

「……ねえ、湊……」

「ん? 何?」

変わらず笑みを浮かべている少年、湊に、沙羅は引きつった笑みを返した。

震える指が示している先には、黒い、ものが。

「これ、何?」

「え? 山菜のゆでものだけ?」

「え?」

「え?」

しばしお互い見つめ合い、沈黙が流れた。

沙羅はこめかみを押さえ、眉間にしわを刻んだ。目の前にいる少年は怪訝な顔をして沙羅を見ている。溜息を吐いて、沙羅は包丁を手に取った。

「そつか……。あなたの料理の腕はわかつたから……。とりあえず、居間で待つてて」

「? ……うん、わかった」

首を傾げつつ、湊は台所から出て行く。沙羅は湊の作った『料理』を一瞥して、どう片付けようか途方にくれた。

沙羅は、作った料理を椀に入れると、居間に通じる扉を開けた。

「ご飯、できたよ

そう声をかけると、居間で書物を読んでいた湊が顔をあげ、嬉しそうに笑った。

「運ぶの手伝つよ

そう言つて、置いてあつた料理を運んでいく。

「いただきます」

行儀良く手を合わせる湊に、沙羅は笑つた。二人とも同時にご飯を食べていく。

「おいしい！すゞいな、沙羅！」

瞳を輝かせて言う湊に、沙羅は驚いた。思つていた疑問をつい、口にする。

「湊は……貴族なんじゃないの？」

沙羅の言葉に、湊の動きが止まつた。

「……なんで、そう思うんだ？」

逆に問い合わせられ、沙羅は首を傾げた。

「なんでつて……。服を見ればわかるわ。明らかに、平民ではないでしよう？」

沙羅の言葉に、湊は顔を顰めて、頭を搔いた。髪が乱れる。

「あー……。そつかあ……そうだよな……」

失敗した、と湊は呟いた。

「……うん。確かに、俺は貴族だよ」

「なら、なんで普通に……」

私と生活できるの？と言つ沙羅に、湊は悲しそうな顔をする。その顔に、沙羅は言葉を詰まらせた。

「沙羅が思つてるような身分じゃないよ。俺は」

掠れた声音で、湊は続けた。沙羅は無言で湊の話に耳を傾ける。

「俺は四男で、家も継がないし、……本当に、家の名前しかないんだ」

それに……と湊は呟つ。その時の声が、いつもより低い事に沙羅は肩を震わせた。

「俺は貴族が……家族が嫌いなんだよ。人を見下していて」

家族、と言う時の湊の瞳には、憎悪が籠もつていた。拳を強く握りしめて、湊は俯く。

「俺は絶対医者になつて、一人でも多く人を救いたいんだ」

「そっか……」「

頷いて、沙羅は湊の拳の上に手を置いた。驚いて、湊は顔を上げる。

前には、沙羅の嬉しそうな笑顔があった。

「湊なら、絶対なれるよ。……私を助けてくれたんだし」

その笑顔に、湊は身体を固まらせる。しばらくして、頬を紅潮させた。

「あ……、あ、りが、とう……」

片言でよしやくそれだけ言つと、湊は沙羅から顔を背け、箸を動かし始めた。

「え？ 外行くの？」

毎過ぎ頃、外に行く準備をしていた沙羅を呼び止めた湊は、驚いたように田丸を丸くした。沙羅は頷く。

「そう。明日の朝のぶんの山菜、採りに行かなくちゃいけないから」「俺も手伝うよ」

そう言つて自分も行く準備をしようとする湊を、沙羅は慌てて止めた。

「だ、駄目！」

強い声に止められ、湊は首を傾げる。

「どうして？」

当然の疑問に、沙羅は氣まずそうに顔を俯かせた。

「えつと……その

歯切れの悪い物言いに、湊は怪訝な顔をする。沙羅は居たたまれなくなり、声も自然と小さくなつた。

「……村の人と、会つたら……」

言葉の続きは、厭といつほど分かつた。

沙羅の手や、足には未だ癒えない傷がある。その原因は。

湊は眉間にしわをよせ、沙羅を見た。無言になつた湊に、沙羅は

「」

「？」

聞き取れず聞き返すと、湊は沙羅から籠を奪つようにして言った。

「へいがく」

「駄目だよ……！奏、食べられる山菜わからぬでしょ！？」

「……これでも医者志望なんだよ？余裕余裕」

剽々とした様子は湯は沙織は肩をハの字にした

小さく付け足された言葉に、沙羅は泣きそうになつた。湊は沙羅

の頭に手をのせ、無造作に？

それじゃあ、行つてきます

「行つてらつしゃい

第四話（前書き）

大丈夫だと言われても、やはり心配だった。

沙羅は何度目かの溜息をはいて、自分の手を見つめる。何もしていないと落ち着かなくて、先ほどまで掃除をしていたのだが、それも終わってしまった。沙羅は書物なんて高価な物を持つていらないので、暇をもてあますしかない。

「湊……」

不思議な少年だ。

普通、進んで不吉の象徴と共に住もうなどとは思わないはずなのに。

ましてや彼は貴族だ。沙羅の知っている貴族とは、沙羅たち平民にとつては雲の上に等しい人。そんな人がこんな寂れた木屋に住むなんて。

そんな事を考えていると、扉の開く音がした。勢いよく顔をあげ、沙羅は振り向く。

「ただいまー。ごめん、少し遅くなつた……」

そこには、少々着物を土で汚した湊がいた。肩には、山菜をたくさん入れた籠を背負つている。沙羅は慌てて湊に駆け寄る。

「おかえりなさい……す、ごいわね、こんなにたくさん」

籠をのぞき見て、沙羅は感歎した声を出す。湊は自慢げに笑つた。

「ふふん、そうだろう。なにせ俺は医者志望だからなー。」

湊の言葉に笑い返し、沙羅は籠を受け取つた。

「……つて、そんな服汚して!どうするの、こんな高価な布を……」

「」

血相を変えて、沙羅は湊の着物の汚れを払い落とそうとする。その様子に湊は苦笑した。

「別に、これくらい大丈夫だよ……。それよりさ、沙羅」

話題を変えられ、沙羅は小首を傾げた。湊は沙羅と田線を合わせ

るよつに少しががむ。

「明日、一緒に外に行かない？」

「え……」

驚いたように田を丸くして、沙羅は湊を見た。
「沙羅に見せたい場所があるんだ」

次の日。沙羅と湊は夕方になると外へ出た。

村人と会うことを避けたい沙羅は、最後まで外に出るのを渋ったが、湊がどうしても、と懇願こんがん混じりに言うので折れたのだった。

上機嫌で森を進んでいく湊の後ろを、沙羅は少しおびえながらついて行つた。いつ村人に会うか分からぬ場所だ。前は別に会つても良かつたのだが、今は湊と一緒にいる。もし村人が湊を傷つけたら……考えただけでも悪寒が走つた。

「もうちょっとだよ」

沙羅のほうを振り向いて、湊は無邪氣に微笑んだ。それを見て、沙羅の不安は少し薄らぐ。

「ついた！」

湊の言葉に、沙羅は俯かせていた顔を上げた。

「綺麗……」

そう、沙羅は思わず呟く。それほどにまで、目の前に広がる景色は美しかつたのだ。空は赤く染まり、夕日の光は川で反射して、より一層美しく輝いている。頬を掠める風は冷たさを伴つていたが、それすら気にさせないほど、美しい景色だった。

「……昨日、山菜とつてたら丁度見つけたんだ」

沙羅の反応に満足したのか、湊は上機嫌のまま口を開いた。

「綺麗だろ？」

「うん！」

元気よく頷いて、沙羅は食い入るように前を見る。それを湊はまぶしそうに見て、微笑んだ。

一人はしばらくそこから動かず、ずっと景色を見ていた。

夕日が沈みかけた頃、一人は木屋へと帰った。

そしていつも通り晩ご飯を作り、布団へ潜る。その頃にはもうすっかり寒くなつていて、沙羅は身体を丸めたまま眠つた。

次の日、朝早くおきて、沙羅は水をぐんでいた。その時後ろから足音がした。湊かと思い、振り返る。

「はやいわね」「

振り向いたところで、沙羅の表情は音を立てて固まった。顔を青くさせ、沙羅は前にいる人を見つめる。

五、六人ほどの大人だった。全員手には木の棒を握つていて、顔は憎悪に満ちている。沙羅は震える四肢を叱咤して、逃げようと足を動かす。

しかし、それは叶わなかつた。一人が沙羅の長い髪を掴んだのだ。力強く引っ張り、沙羅はあっけなく地面に背中から打ち付けられる。苦痛の呻きをあげ、沙羅は咳き込んだ。休む暇もなく、木の棒で全身を殴られる。激痛に沙羅は悲鳴をあげた。

この場を離れようと足を動かすが、すぐに気付いた男に殴られ、崩れた。

(駄目。駄目　　ここには、湊が……)

騒ぎに気付いてきたら、あの少年まで巻き込んでしまう。それだけは避けたかった。

「お前さえいなければっ！」

「お前がいるからここ最近不作なんだ！」

「死んじまえ！化け物！」

人たちの言葉に、沙羅は顔を歪める。何度も聞いてきた言葉だが、やはり慣れない。いつ聞いても、泣きそうになる。

「化け物があ！」

そう言つて振りかぶった木の棒を、沙羅は呆然と見ていた。
(ああ……私、死ぬのかな?)

覚悟して目を瞑る。が、その時聞き慣れた声が響いた。

「なにしてるんだ！」

それは紛れもない、湊の声だった。

「なんだ、お前！」

「誰だ？」

突然はいつてきた少年に、大人たちは動搖の声を上げるが、すぐに気を取り直したのか、不気味に笑う。

「なについて……わからないのか？化け物退治だよ」

「そうだ！こいつがいるせいで、ここ最近不作続き…」

「このままじゃあ、赤子は死んじまう」

大人の言葉に湊は眉間にしわを寄せた。

「……不作と沙羅は関係ないだろ？そんな事いつて恥ずかしくないのか？」

湊の言葉に、男たちの一人が顔を赤くする。沙羅に向かられるはずだった棒を、湊に振りかぶった。

「この餓鬼……っ！」

沙羅は顔を真っ青にして、叫ぶ。

しかし、湊は男の攻撃を軽くよけた。それを見て沙羅は安堵の息をついた。

男は諦めず湊の棒を振りかぶるが、それをもう一人の男が止めた。

「また！……おい、あいつの服見てみろ」

仲間の言葉に、男は怪訝な顔をして湊の服を見る。

すると、先ほどのままで真っ赤だった顔がいつ間に真っ青になつた。

「あ……貴族……！」

他の男も気付き、一田さんに逃げていく。

それを見送り、湊は呆れたように溜息をついた。

「……大丈夫、沙羅？」

傷だらけの沙羅のもとへ駆け寄つて、湊は沙羅の身体を診た。

（酷い打撲だ……）

早く治療しないと、と思い、湊は沙羅を抱き上げる。その時になつて沙羅はようやく口を開いた。

「「めん……なさ」」

思わず謝罪に湊は驚いたが、やがて悲しそうに顔を歪めた。

「沙羅は悪くない……謝らなくて良いんだ……」

その言葉に沙羅は声を押し殺して泣いた。

沙羅が泣きやんだのは、疲れはてて眠つた時だつた。

規則正しい寝息をたてる沙羅を見つめて、湊は安堵の息をつく。沙羅の田元は泣きすぎて赤くなつていた。井戸の冷えた水につけた布を沙羅の田元に当ててやり、湊は薬草の片付けに入つた。

慣れた手つきで薬草を片付けると、家出する時持つてきておいた書物を手に取つた。もちろん医学の内容だ。静寂の中、紙のこすれ合ひ音だけが響く。しかしそれは長く続かず、湊は書物から顔を上げた。乱暴な仕草で書物を床に置き、前髪を？き上げる。どうしても集中できない。

（俺がもつと早く起きていれば……！）

沙羅はこんな傷を負わなかつたのに、と罪悪感だけが心に残る。眉間に皺をよせて、湊は下唇を？んだ。口の中に血の味が広がつて、余計苛立ちを煽つた。

「沙羅……」

隣で眠る少女の名を呴き、田を強く瞑る。それでも脳裏から先ほどの光景は消えず、湊は拳を握りしめた。

貴族は嫌いだ。厭、貴族が嫌いじゃなくて、自分の家族が嫌いだつた。しかし、今隣にいるこの少女を暴行から守つたのは紛れもなく、自分が『貴族』だからだ。大嫌いな親の身分のおかげで、こうして沙羅は助かつた。

それがどうしようもなく、自分には『肩書き』しかないと言われているようで、情けない。

「ごめん、ごめん……」

湊は、項垂れて謝り続けた。

重い瞼をゆっくりと開けて、沙羅は起きあがつた。

「…………ん…………ん？」

記憶が曖昧あいまいで、良く思い出せず、眉を寄せる。

（確か、私井戸の水を……）

そこまで思いだし、沙羅の顔は蒼白になる。

「湊つ！」

勢いよく起きあがり、沙羅は少年の姿を探した。部屋の隅には、湊が持ち歩いている医療道具の入った鞄が無造作に置かれている。部屋にいる様子はなかった。沙羅は力の入らない足を叱咤して、外へと急ぐ。

外に出た瞬間にちらを襲う冷たい風に、思わず目を瞑るが、すぐに開けて沙羅は周りを見た。

「あ…………」

「沙羅！」

湊は丁度井戸の水をくんでいるところだった。沙羅を見て驚きに目を丸くする湊に駆け寄る。

「沙羅、駄目だ、まだ傷治つてないんだから…………」

心配げに眉を寄せる湊を、沙羅は睨む。

「…………なんで、あんな危ないことしたの」

沙羅の言葉に、湊は顔を顰めた。

「なんであって……俺が出てこなかつたら、今頃沙羅は…………」

「だからって！」

声を荒げる沙羅に、思わず湊は黙つた。目の前にいる少女は本氣で怒っている。

「湊がもし怪我をしたらどうするのー！」

湊を鋭い眼光でにらみつけて、沙羅は怒鳴つた。視界がぼけやる。

「私は…………私は、傷ついて欲しくなかつたから…………」

だからあの場から離れようとしたのに。

「なんで……」

後は嗚咽で言葉にならなかつた。頬を伝う涙をぬぐわず、沙羅は泣く。それを見て、湊は悲しそうな顔をして、恐る恐る沙羅の頬に手を伸ばした。

伝う涙を優しくぬぐう。沙羅は湊を見た。

「……俺は、沙羅は傷ついてるのは見たくない。……泣いてるのも、見たくないんだ」

優しい動作で涙をぬぐう湊に、沙羅は首を振った。

「湊……もう駄目だよ。ここにいたら……私といたら、危ないから

……」

そう言つて湊を押し返す沙羅に、湊は首を横に振つた。

「沙羅は不吉の象徴なんかじゃない。俺が保証する。俺は大丈夫だよ、傷なんてついてない。一応武術だつて習つてたし……だから

すこし屈んで湊は沙羅を見た。そして微笑する。

「一緒にいさせて」

沙羅は顔を歪めて湊の背に手を回した。

湊は驚いたのか身体を硬直させたが、やがて笑つて沙羅の背に手を回した。

ようやく泣きやんだ後、沙羅は湊を見て、微笑んだ。

「……もう、大丈夫よ。ありがとう、湊」

そんな沙羅を見て、湊は少々名残惜しげに腕を放した。そう思つてしまふ自分自身に、湊は顔を赤くする。突然頬を紅潮させた湊に、沙羅は小首を傾げるが、対して気にしていないのか、問うてくることはなかつた。それに湊は安堵の息を吐いた。

「ねえ、沙羅」

わざと明るい声で湊は沙羅に言った。

沙羅はん? と言い、湊を見る。

「ちょっと、散歩に行こう」

湊の誘いに、沙羅は目を見開いて、しばらく逡巡しうんじゅんしていた。が、しばらくして小さく頷いた。

湊は嬉しそうに笑い、沙羅の手を引く。一人は手を引いて歩き出した。

お互いの手から伝わる温もりのためか、寒い、とは思わなかつた。

二人は昨日行つたあの川まで来ると、足を止めた。もう夜なので、川には月が映つていて、夕暮れとは違つ景色が広がつていた。

「寒くない? 大丈夫?」

心配げにこちらを見る湊に、沙羅は微笑みを返す。

「大丈夫よ。……綺麗だね」

沙羅の言葉に湊は嬉しそうに微笑むと、川辺に座つた。その隣に沙羅も座り、沈黙が広がる。川の流れる音だけが響く中、二人は目を瞑る。

しばらくたつてふと、湊が空を見上げた。

「沙羅、見て……雪だ」

暗闇でも分かる白に、湊は掴もうとするように手を伸ばした。沙羅は驚きに目を丸くして、歎息の息を吐く。

「わあ……もうそんな時期なのね」

空に向かつてを翳し、笑う沙羅に湊は頷いた。

「そうだね……酷くなる前に帰ろうか」

「そうね」

湊は立ち上がり、沙羅に手を伸ばす。その手に、沙羅は躊躇せず、自分の手を重ねた。

第六話

沙羅の家に村人が乗り込んできた時から、3日がすぎた。外はすっかり雪で覆われて、眩しさに沙羅は目を細める。足首が埋もれる程度に積もった雪を見て、微笑を浮かべた。吐く息は白く、着物一枚では耐えられない。

羽織つていたもう一枚の着物を押さえて、沙羅は空を見上げた。
「今日は快晴か……」
雲一つない青空だ。

「ねえ、沙羅の名前って何か由来でもあるの?」

朝ご飯を食べている時、ふいに湊がそう言った。予想外の質問に、沙羅は目を丸くする。

「……どうしたの? いきなり」

「いや、『沙羅』って名前、珍しいなあ……と思つてさ」

そう言つて笑う湊に、沙羅は小首を傾げた。

「湊は『沙羅双樹』って知つてる?」

「え? ……仏教の?」

「そう。それ」

沙羅双樹

娑羅双樹

釈迦が死去した時に臥床の四辺にあつ

たといわれている花。

「その沙羅双樹に擬せられ、夏椿は別名娑羅樹しゃらのきつて言われてゐるそつの」

笑つて、沙羅は湊を見た。

「母様が夏椿が好きでね。それが私の名前の由来。最後まで椿か沙

羅か迷つたらしいけど……」「

「そうだつたんだ……」

湊はへえ、と言つて、思案するよつな顔をする。そして、顔を上げた。

「夏椿じやないけど、今も椿つて咲いてるよな?」

湊の言葉に沙羅は頷いた。

「うん。この木屋の裏に咲いてるわよ」

見る? という沙羅の言葉に、湊は嬉しそうに笑つて頷いた。

「勿論!」

木屋の裏には確かに、赤い椿が咲いていた。
うつすらと雪化粧をした椿を、湊は見入る。

「へえー。こんな所あつたんだ……」

氣付かなかつた、と呴いて、湊は周りを見回す。そんな様子に沙羅は思わず笑みがこぼれた。

「全然氣付かないでしょ? 母様も、住み始めてからしばらく氣付かなかつたんですって」

木屋は樹で覆われていて、なかなか後ろが見えない。木々の間を通つてようやく見つけられる場所なのだ。

「私が……10歳になつた頃だつたかな、ここを教えてくれたの」
瞳のせいで外に出ることがほとんど無かつた昔を思い出し、沙羅は目を伏せた。時折母と一緒に山菜を探りに行つたりはしたが、それは本当に稀で、母が死ぬまで沙羅はほとんど一人で出歩くことが出来なかつたのだ。

「綺麗だな……」

そんな沙羅の思考を打ち消すよつ、湊が徐に口を開いた。

「え?」

顔を上げる沙羅に、湊は笑う。

「普通の椿でこれだけ綺麗なら、沙羅の母さんは『好きだ』て言つ
夏椿はもっと綺麗なんだろうな」

そうだ、と湊は顔を輝かせて沙羅に身体を向けた。

「夏椿が咲く季節になつたら、一人で見に行こう！」

そう言つて小指を差し出す湊に、沙羅は戸惑つた。しかし遠慮がちに自分の小指を湊のそれに絡める。すると湊は子供のようにうに笑つて言つた。

「約束だな！絶対見に行こう！」

声を弾ませる湊に、沙羅は安堵したように笑つた。

夕方。湊は急ぎ足で木屋に向かつていた。

(少し遅くなつたなあ)

籠を担ぎなおし、足を急がせる。昼食を食べた後、湊は山菜を探りに行つていたのだ。

冬になり、やはりなかなか見つけられず粘つっていたのが悪かつたのか、気付いたらもう黄昏時だった。

雪が積もつているせいで酷く歩きにくい。眉間にしわを寄せ、湊は溜息をついた。着物の裾はすっかり濡れてしまつていて、足もかじか悴んでいてもう感覚が麻痺していた。

(はやく帰ろう)

林を抜け、ようやく木屋についた。

安堵の息を吐いて、湊は扉を開ける。

「ただい

ま、と言おうとして、湊は固まつた。

部屋の隅で、沙羅が壁にもたれかかり寝ていたのだ。

机のある夕食は見たところ、手がつけられてないようだった。

(俺を待つてたのか……)

しばらく呆然と沙羅を見ていたが、は、と湊は我に返った。
起じやうと沙羅に手を伸ばす。が、触れる直前に手を止めた。
気持ちよさそうに寝ているのを、起じして良いのだろうか。
(どうしよう……)

唸りて、湊は沙羅を見た。規則正しい寝息を立てている彼女は、
とても心地よさげだ。

子供のような無垢な寝顔にじぱらしく見入る。

(つて馬鹿か俺。今はそんなこと言つてる場合ぢゃなくて
慌てて顔を左右に振り、湊は思考を入れ替えた。

その時。

「…………」

瞼を震わせ、沙羅は目を開けた。

輝く銀の瞳に、思わず湊は息を詰める。

(やつぱ綺麗だな……)

「湊……？」

寝ぼけているのか、ビンがこいつもよつぱりずな沙羅の声に、湊
は微笑を返した。

「ただいま、沙羅」

そう言つと、沙羅は瞬きを繰り返し、やがて完全に覚醒したのか
目を見開いた。

「え、あーおかえり、湊！」

慌ててそう返す沙羅が可笑しくて、湊はまた笑った。

ずっと共にいれるこの時が永遠に続けばいいの。

『ずっと一緒にいれればいいの』

その淡い願いが叶えられないことなど、一体誰が予想したとこうのだろうか。

白い吐息にて、湊は思わず顔を顰めた。これからが冬の本番なのだ、と思い知らされる。

沙羅と湊が住んでいる小屋は壁が薄い。外とさほど変わらない温度なのだ。冬の初めですら夜、寒さで丸くなるほどだったのに、本格的な冬になれば想像を絶するものだろう。

そう思っても、沙羅のもとを出て行く気にはなれないのだ。
(我ながら、随分執着しているなあ……)

思わず苦笑して、湊は空を見上げた。

「湊ー？」

小屋から沙羅が呼ぶ声がして、湊は振り返る。机に食事を運んでいる沙羅を見て、湊は慌てた。

「ごめん、沙羅！」

居候の身で、家事を手伝わず考え方をしていたことに謝罪し、台所に急ぐ。

そんな湊を沙羅は可笑しそうに笑つた。

冬なので当然、水は肌を刺すような冷たさだ。覚悟をしていたが、それを上回る冷たさに、湊は思わず声を上げた。

「つめた……っ」

湊の反応に、沙羅は心配げな顔をした。

「やっぱり、私がやるうか？」

遠慮がちにそう言う沙羅に、湊は苦笑して首を横に振った。少し水に触つただけでもう指先の感覚はなくなりつつあるが、そんなこと構つてはいられない。

「大丈夫。俺がやるから、沙羅は休んでて」

湊の視線の先には、汚れた食器類がある。それを今、誰が洗うかで二人はもめているのだ。

結局、湊の強い意志に負けて、沙羅は心配げだが台所を後にした。湊は安堵の息をつくと、食器類を一瞥する。それを見つめた後、明か冷たそうな、桶に入った水を凝視して、掠れた笑みを浮かべた。

(冬の水を甘く見ていた……！)

冷や汗をかきつつ、湊は食器類を全部洗つた。

両手はもう悴んで、感覚がない状態だ。沙羅は良く毎日こんな事ができるものだ、と思わず湊は感激した。

桶に入った水はもう空だ。汲んでこよ、と桶を両手に、湊は台所を出た。

「あ、湊。おわった？」

居間では沙羅が着物を縫い直していた。顔をあげ、心配そうにちらを見る沙羅を安心させるため笑って、湊は首を縦に振る。

「うん。終わつたよ。桶の水もないから、汲んでくる」

湊の言葉に沙羅は頷いて、縫い直しを再開した。縫い直されいる着物を見て、湊は動きをとめた。着物を凝視していると、さすがに気付いたのか沙羅が小首を傾げた。

「どうかしたの？」

沙羅の声に我に返つた湊は手を振った。

「いや、別に……。ただ、見たことないやつだったからさ」「見たことない、とは沙羅が着てているところを、といふ意味だ。

言葉の意味を理解して、沙羅は頷いた。

「そうね……。これは、湊に会つ一日前に着ていたものだから」
そう言つて目を伏せる沙羅に、湊は怪訝な顔をした。見たところこの着物は、所々破けていたようだ。普通に過ぐしていく、なぜこんな風になるのか。

答えはひとつ

。

一瞬怒りで目の前が真っ赤に染まった。

「……村の人、に」

湊の一言に、沙羅は勢いよく顔を上げた。そしてほんの一瞬、泣きそうな顔になる。

「……」

黙り込んで、俯いてしまつた沙羅に手を伸ばしかけて、思ひとどまつた。

行場のない手をゆづくつと下ろして、湊は踵を返す。

「じゃあ、水汲んでくるね」

一言声をかけて、湊は小屋から出た。

沙羅に留つた通りの手順で水を汲み、湊は息をついた。

(馬鹿が、俺は……)

先ほどの、沙羅に対する態度はどう見てもハツラツだ。恐がられただろうつか、と湊は眉を寄せた。自己嫌悪に陥り、自然と顔が俯く。

座り込むと、雪で着物が濡れ、すぐに足が冷たくなった。相変わらず、溶けずに残っている雪は容赦なく体温を奪っていく。

「はあ……」

長い溜息を吐いて、湊は田を瞑つた。

しばらぐして、両手で頬を叩く。乾いた音が響いた。田をあけ、「よし」と少しひらくと、湊は勢いよく立ち上がった。

桶を持ち上げて、小屋の扉を開ける。入ってきた湊に気付き、沙羅は小さく肩を震わせたが、湊をけやんとまつすぐ見つめた。

「あの、湊……」

途惑いの滲んだ声に、湊は苦笑する。桶を床において、沙羅と田線があうように腰をおろした。

「わつあはー」めん、沙羅。完璧俺のハツラツだつた

もう言つて顔色を伺つようになつて沙羅を見ると、沙羅は驚いたのか、目を丸くしていた。

「……いいの。でも、私何か湊の気に触ることをしてしまつたんでしょ？」

沙羅の問に湊は首を横に振つた。知らずと強い口調でまくし立てる。

「違う違うー沙羅は悪くないよ、ただ俺が苛ついてるだけでー」だから気にしないで、と言つ湊に、沙羅は頷いて、安堵の息を吐いた。しかしその瞳は悲しげに細められたままだ。

「ごめんなね。湊」

小さい謝罪を、湊は聞こえなかつたふりをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1055x/>

沙羅双樹

2011年11月27日22時48分発行